

は じ き 土師器皿と アカムヌー

■ 出土地：天界寺跡・首里城跡・渡地村跡

先月のまいコレで紹介したグスク土器は沖縄で作られたものでしたが、今回は本土からもたらされたと思われる土器のうち土師器皿はじきをご紹介します。

土師器皿とは、古墳時代以降に釉をかけずに焼いた土器の皿のことで、中世（鎌倉時代）以降のものは「かわらけ」ということもあります。これらの皿は、ごはんやおかずなどを載せる食器としてだけでなく、油を入れて火をともしとうみょう灯明皿にも使われました。食器としては今でいう紙皿のような使い捨て用ともされ、中世では武士などの宴会で使用したものとも考えられています。

今回の土師器皿は、大きさは口径10～20cm、底径が5～10cmと底が広めの形で、器面はクリーム色、滑らかで非常に丁寧に作られています。また、器面が黒くなりややざらついているものもあり、火を受けた可能性はありますが、灯明皿とは言い切れません。この土師器皿は、首里城跡と那覇港に位置する渡地村跡でしか出土しておりません。また、鹿児島城跡などの南九州の土師器皿と類似しており、16～17世紀ごろのものと考えられます。

なお、沖縄では素焼きの皿としては、近世以降に壺屋で作られた陶質土器（方言で「アカムヌー」）と呼ばれるものがありますが、今回の土師器皿に比べて器面は赤く、硬く締まっており、また大きさも口径が10cm、底径が3cm前後と小ぶりで底が狭いものしかありません。一方、このアカムヌーの皿は明らかに灯明皿として使われたものがあります。形や大きさは違いますが、アカムヌーの灯明皿は土師器皿の影響を受けたものかもしれません。

今回の土師器皿は、1609年の薩摩侵攻ごろの南九州など日本産のものと思われ、日本特に薩摩との複雑な関係からもたらされたものかもしれません。

〈瀬戸 哲也〉